

聖書：マタイ 10：34～42

説教題：何のために生きるか

日時：2019年4月14日（朝拝）

マタイの福音書 10 章は、弟子たちを初めて福音宣教に遣わす際にイエス様がお語りになった言葉です。今日はその最後の部分です。イエス様と一緒に神の国のメッセージを伝えることは素晴らしい特権であり、この上ない光栄な働きです。しかし誤った期待を持っていると大変なことになります。私たちはイエス様の福音を聞いて心から素晴らしいと思います、皆がそう思うわけではありません。むしろこれに反対し、あなたがたを迫害する人たちが出て来る、とこの章で言われて来ました。

今日の最初の 34 節でも、イエス様は「わたしは平和ではなく、剣をもたらすために来た」と仰っています。「剣」とは「争い」や「戦い」を象徴する言葉です。ここで「剣をもたらすために来た」とイエス様は仰っていますが、もちろんこれはこのことが目的であるということではありません。そうではなく、必然的な結果としてこうなるという意味です。一人が福音を聞いて信じ、もう一人が信じないままだと、そこにはある意味での分裂が生じます。時にそれは緊張関係となり、争いにも発展します。一人が罪を赦してくださるイエス様に従いたいと決心し、もう一人がそんな道は行くな！とえば、二人の間には不一致が生じ、戦いが起こります。もちろんイエス様は真の意味では平和をもたらすために来られました。クリスマスの時に読まれるイザヤ書 9 章でイエス様は「平和の君」と呼ばれていますし、クリスマスの夜、天使が現れて「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」と歌いました。しかしイエス様がもたらす平和は第一に「神との平和」です。ある人はこの神との平和を喜んで受け入れますが、ある人は受け入れず、拒絶します。そうするとこれを受け入れた人と受け入れない人との間に対立の関係、分裂の関係が生じることになるわけです。

それは家族の間にも起こるとするのが 35 節です。「わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。」すでに同じことは 21 節でも語られていました。他人ならいざ知らず、家族である者たちは余計に自分の家族には同じ

道を行って欲しいと願います。そのために一層戦いは激しくなるのです。そのことに驚かないように！とここで言われています。必ずそういう結果になるのである！私たちはこのイエス様の言葉をしっかり心に留めておきたいと思います。

そしてイエス様は37節でこう言います。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」 きっと世の中の多くの人々は初めてこの言葉を聞いたら、何とひどい言葉か！と憤慨するに違いないと思います。キリスト教は親不孝を奨励する宗教なのか。家族を崩壊させても気かけない宗教なのか！と。しかしキリスト教が親を大事にすることは十戒の第5番目に「あなたの父と母を敬え」とあることから明白です。他にも色々な箇所が、親を大事にすべきこと、家族を大事にすべきことを教えています。しかしここでイエス様が言っていることはこういうことです。それはどんなに大事な人間関係も、イエス様に従うことの前には道を譲らなければならない。イエス様に従うことが、他のどんなに大事な人間関係よりも優先されなければならない。なぜイエス様はそう言えるのでしょうか。それは根本的なこととしてイエス様が神であるからです。普通の人間にはこんな大それたことを言う資格はありません。こう主張できるのは、イエス様が神であるからです。先ほど十戒に触れましたが、十戒も人間関係に関する戒めの前に、まず神との関係における戒めが来ています。父母を敬うことは神が命じている大事なことですが、それよりも神に従うことが先です。その神への義務を超えて父母が自分たちに従え！と子どもに要求するのは、神から与えられた権威の乱用です。越権行為です。自らを神の位置に置こうとする誤りです。そのような要求に対しては、私たちは「人に従うよりも神に従うべきです」という、あの使徒たちの告白に生きなければなりません。

しかしこの根本理由とつながっているもう一つの理由もあります。それは親や家族は私たちに多くの愛情を注いでくれましたが、イエス様は私たちに何をしてくださったかということです。イエス様はご自身が神だから、他の誰よりもわたしに従え！とただ上から権威的に命じているわけではありません。神であるイエス様は私たちを愛して、人となって地上に来て、私たちの救いのために十字架にかかってくださいました。私たちを罪のさばきと滅びから救い出すために、ご自身が身代わりとなり、その尊い命を捨て

てくださいました。イエス様は次の節で「自分の十字架を負って、わたしに従って来ない者は、云々」と語られますが、私たちに要求する前に、まずご自身が私たちのために十字架への道を進んでくださいました。この私たちにとって最も大事なお方を脇に退けておいて、一体他の誰を大事にすべきでしょうか。両親も家族も、私たちに良くして下さって、私たちは心から感謝すべきですが、イエス様と比較するなら話の次元が違って来ます。私たちはこの両者への愛が両立することを願いますが、もし父母がイエス様に従うことを後回しにして自分たちに従えと要求して来るなら、それには従うことができません。

38 節でイエス様は「自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません」と言われます。十字架はご存知の通り、当時の極刑です。この刑を科される人は、刑場まで自分の十字架を背負って歩いて行かなければなりません。もう戻って来ることはあり得ません。一方通行の行進です。その途中では人々からさんざん罵声を浴び、さげすまれ、見下されます。そして最後に待っているのは死です。ですから十字架を負うというのは、「自分に死ぬ」ことです。自分を主張することを放棄することです。そのようにしてイエス様に従うようでないイエス様にふさわしい者ではない。すなわちイエス様の弟子にはなれない。このニュアンスを言い換えて説明しているのが次の 39 節です。自分の十字架を負ってイエス様に従って来ない者、すなわち自分に死んでイエス様に従うことをしない者とは、39 節前半にある通り、自分のいのちを得る者です。すなわちこの世の自分のいのちを保とうとする人。世からさげすまれないようにする人。自分に死ぬよりは自分を主張する人。自分を保つためにイエス様を後回しにしてイエス様と距離を取る人。そうする人はこの世でうまくやっていける。この世で自分のいのちを得る。しかしそういう人に待っている将来は「それを失う」ということです。この世のいのちを保っても、イエス様との関係がなければ、その人はいのちを持っていません。やがてさばきの日を迎え、神の前に立たされた時、自分は何も持っていない者であることが判明する。それまで表面的に一時的ないのちを保って来たが、本当のいのちはなかった。そしてその人は永遠のさばき、永遠の滅びを刈り取らざるを得ない。

一方、39 節後半にあるように、イエス様のために自分のいのちを失う人はどうでしょ

うか。その人はイエス様に従うために、この世からは蔑まれ、迫害されます。その人は自己主張の道を捨てます。この世のものを全部失っても、イエス様について行くことを一番にします。その人に約束されている将来は「いのちを得る」ということ。その人は、この世から見れば十字架の死の行進をしているように見えますが、イエス様とともに歩む中で、実はイエス様との間に真の交わり、いのちを経験します。そして究極的には地上の短い歩みを終えて後、最後の審判以降において、永遠のいのちを天の御国で享受します。

私たちはこのどちらの道を行く者でしょうか。私たちの前にはこの二つの道のどちらかしかありません。一つはこの世の人々と争いが起きないようにすることに第一の関心を払って、イエス様を後回しにし、この世の自分のいのちを保ち、やがてそれを失い、かの日に何ら大事なものを持っていない自分を発見する歩みです。もう一つはイエス様に従うことを第一にするために、この世での自分のいのちを救い出さず、自分に死に、いのちを失うような歩みをここではするが、実はまことのいのちをそこに見出し、またやがての日に永遠のいのちに生きて喜び楽しむ人。良く考えて、自分の行くべき道を選び取るように！とイエス様は迫っています。

結びとなる 40～42 節は、イエス様に従って歩む人への励ましの言葉です。まず 40 節に「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」とあります。私たちは苦しみにある時、こんな苦しみにあっているのは自分だけだと思いやすい者ですが、実は私は一人ぼっちではないということです。私はキリストの代理者、キリストの大使として立てられている。さらにはキリストを遣わした父なる神の代理者、父なる神の大使としても立てられています。そして 41～42 節は、主の働き人を受け入れ、支えることについての勧めです。「預言者を預言者だからということで受け入れる人は、預言者の受ける報いを受けます」とありますが、「預言者の受ける報い」とは何でしょうか。参考になるのは I 列王記 17 章に出て来る預言者エリヤを迎えたツァレファテのやもめの話です。エリヤは神に従う預言者として早魃の中でも守られましたが、彼を迎え入れた彼女も、その結果、支えられました。つまり彼女は預言者を受け入れたことによって、預言者の報いにあずかったのです。彼女自身、望みがなかった者でしたが、預言者を受け入れた

結果、預言者が受けた報いを一緒になって受けたのです。

42 節には「この小さい者たち」という表現があります。これは 40 節で直接的に語りかけられた使徒たち、また 41 節の預言者、義人を含む人々のことです。神の国のために働くどんな人であっても、この世から見れば小さく見積もられている人々かもしれません。しかしそんな小さい者たちの一人に一杯の水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはないと言われていています。世の人々と同じ目線で見るとはならず、神の視点に立って、神の国のために働く小さい人々を助け、支えるなら、その人はやがて大きく報われる。主のために！という思いで神の国のための働きと一緒に加わるなら、たとえ水一杯の支援でも神は御心に留めてくださり、そのわざに必ず報いてくださるのです。

果たして私たちは日々、何のために生きているのでしょうか。どんなことに動機づけられて、与えられている限られた一生の時間を使っているのでしょうか。世と調子を合わせ、この世の人々と一時的・表面的な平和を保つことに苦心し、この世のいのちを保って、やがてそれらすべて失うために生きているのでしょうか。それとも主イエス様がしてくださったことに心から感謝し、主と主の御国のために、十字架を負うことも厭わずに進み、そこにいのちを見出し、いつまでもなくなる永続に価値が残る人生を歩む者でしょうか。罪を犯して神から離れ、そのままでは救いがなかった私たち。そんな私たちのところにイエス様が来てくださり、十字架の道を進み、私たちの救いを勝ち取ってくださいました。そのイエス様の後について十字架の道を進むことをどうして私たちは恥ずかしく思うべきでしょうか。世の人々が何と言おうと、私たちはこれこそを誇りとし、感謝して、イエス様に従って行くべきではないでしょうか。それが自分のいのちを失うようでありながら、実はいのちを得る道だとイエス様は言っています。そしてイエス様とともに神の国を広げるために歩むことこそ永遠の価値を持つ意味ある歩みです。その神の国のために仕えている小さい一人一人、兄弟姉妹を助けて歩む者でありたいと思います。そうする者は決して報いに漏れることはありません。やがての日に大きな報いを期待できます。そのことを楽しみにして、この道を進んで行きたいと思います。